

第11回「泉大津市オリアム随筆賞」

【オリアム随筆賞（優秀賞）】

忘れたマフラー

片岡 美登里・大阪府大阪市

三十年前の十一月十六日。朝九時を過ぎた頃、自宅の電話が鳴った。

「今、病院から連絡あって、お父ちゃんが発作で。あんたも早う来て！」

結婚後、大阪北摂の実家近くのマンションに住んでいた私は、自転車を飛ばした。病院は実家とウチの真ん中辺りの場所で、十分もかからない。ICUに飛び込んだが、母も私も間に合わなかった。七十歳の父は、三カ月ほど前に心筋梗塞で入院していた。退院の話も出るほど回復していたのに、急に発作を起こしそのまま逝ってしまった。

夫も弟も勤め先は大阪市内で、病院にはまだ到着していない。母と私は看護師さん達が父の身支度を整えてくれる間、病室の外の廊下で待つように言われた。まだ実感がわかず聞いた私は、傍らですすり泣く母の声をぼんやり聞いているだけだった。

「結局、お父ちゃんと最後に話せたんはあんたやったなあ」

母の言葉で我に返った。私でよかったのだろうか。父が入院して以来、母は毎日病室に通っていた。父の容態は思ったより軽く元気で、病院は完全看護だ。そんなに毎日行く必要はないと言う私に、母は笑った。

「話し相手するだけやけど、一日一回は顔見せてあげんと。強がり言うてても、お父ちゃん寂しがり屋やさかい」

私はいえ、当時仕事を辞めたばかりで次の就職先を探しているところだった。子供はおらず、時間はある。病院も近い。なのに父を見舞ったのは片手で数えられるほどだった。父が亡くなる前日は、もともと父が出席する予定だった親戚の結婚式に、母が代理で行くことになった。式は名古屋で日帰りだが、さすがに父を見舞うのは無理だと言う。

「あんた、お父ちゃんとこ行ったって」

「一日くらい誰も行かんでも……」

そんなやり取りの後、仕方なしに私が引き受けただけだ。夕方近くに病院に行き、父が夕食を食べ終わるのを待って、お役御免とばかりに帰ってきた。どんな言葉を交わしたのかも思い出せない。

父と私は性格が似過ぎていると、周囲からよく言われた。そのせいか、昔からことごとく衝突してきた。結婚して夫がわざわざ実家近くに新居を決めてくれたにもかかわらず、仕事を口実に滅多に顔を出さなかった。父と顔を合わせれば大なり小なり言い争いになる。それが煩わしかった。最後に父と一緒にいたのがそんな自分だとは。私は、インクの染みのよう

に罪悪感が広がっていくのを感じていた。その時だった。病室から一人の若い看護師さんが出てきて、私達に声をかけた。

「あの、お父さんのベッドの上にこれが」

それは私のマフラーだった。前日父の病室に忘れて帰ったのだ。ふんわり織られたウール素材で、色はロイヤルブルーというのだろうか。目の覚めるような青が、白い病棟に際立っていた。それを看護師さんから受け取ると同時に、思い出した。

「そのマフラー、ええ色や。お前によく似合うてるわ」

私が病室に入るなり、父がそう言ったのだ。

「あ、ああ、これ。お母ちゃんにももらったんやけど、去年の誕生日に」

来んでもええのに。無愛想にそう言われるのを予想していた私は、肩透かしを食った気分だった。そして一瞬、女性の服装には無頓着な父が今日は妙だなとも思ったのだった。そのことを話すと、母は泣き腫らした目をまた潤ませた。

「言うなって止められてたんやけど。それなあ、ほんまはお父ちゃんからやねんで。プレゼントなんて、一大決心やったと思うわ。でも渡す前に、あんたらまた喧嘩してしもて」

そういえば誕生日の数日前、そんなことがあった。喧嘩の理由は覚えていない。きっと些細なことだ。いつもそうだった。

俺はもう知らん。お前が使うなり、好きなようにしろと父から母に渡されたマフラーは、母からの誕生日プレゼントとして私の元に来た。父からだと言けば、私も素直には受け取らなかっただろう。

「お父ちゃん、あんたとはもつと仲ようしたかったんや。嫁いでも近くに住んでくれてるって、陰では喜んではってんで」

俯くと、ポタポタと廊下に涙が落ちた。胸の中で、ごめんと何度も繰り返した。大人になれず、優しくなれなかった自分を悔やんだ。

「そやけど、ようこれ使てるって見せたってくれたわ。お父ちゃん、嬉しかったと思うで」
私は何もできなかった。何も知らなかった。ただ、父の思いを秘めたこのマフラーが、不器用な私たちを最後に近づけてくれたのだ。

その後何年も使い続けたマフラーは、今はくたびれ色褪せて、タンスの隅で静かに眠っている。それでもそこにあるだけで、父がとても近い。あの日のことを忘れることはない。